

前回は、ミツがハンセン病の疑いがあると診断され、その絶望のゆえに彼女は人生において初めて他者を憎み、孤独とはどんなことなのかを知った … ということを書きました。私たちは人生を重ねていくと、たくさんの〈うれしいこと〉・〈たのしいこと〉がある一方、それにまけないくらい多くの〈かなしいこと〉・〈くるしいこと〉があることがわかってきます。できれば後者は少なくありたいものですが、そうは問屋が卸さないようです。いろいろな〈苦しみ・悩み〉はなぜ私たちの人生にあるのか … をミツの人生をたどっていきながら、さらに考えていきましょう。

『手の首のアザ』（三） (p.176~195) その2

「苦しいのは …」

ミツはスール・山形という修道女に案内されて、病棟内の6畳ほどの部屋に案内されました。加納たえ子という女性が同室でした。京都生まれの彼女はピアニストで、結婚を約束した男性もいました。しかしコンサート間近に発症。ハンセン病は指の神経も少しずつ麻痺させるケースもあり、ピアノをあきらめざるを得ませんでした。婚約者も彼女の病気を知り、離れていきました。それまでの順風満帆な人生が、まったく予想もしなかった病という嵐にその航路を絶たれたのでした。

たえ子は病棟の日課を教えてくれたり、生活のようすを話してくれました。ミツは彼女が来たばかりの自分にいろいろ気をつけてくれて本当にありがたかったのですが、悪いとは思いながらも、赤くむくんだ顔の彼女が運んでくる食事に箸をつけることは気がすすみませんでした。でも、たえ子が金持ちのお嬢さんであり結婚相手もいたのに、今こうして一人ぼっちで人里離れた病院にいる … そう思うと、自分のことをわすれて、『なんだか声をあげて泣きたいような衝動に駆られる』ミツでもありました。

夜、ふたりは枕を並べ布団の中で話をかわします。

『泣いているの。』と、たえ子は訊ねた。 / 「ううん。」 / 「苦しいのは体のことじゃなくってよ。二年間のあいだにあたしはやっとわかったわ。苦しいのは … 誰からも愛されぬことに耐えることよ。』

《いちばん恐ろしく・いちばん重い病》

マザー・テレサの言葉です。

- ◇ 『人を打ち砕く最も恐ろしい病は、愛してくれる人が誰もそばにいないという思いです。』
- ◇ 『一切れのパンがなくて死にかけている人は世界中にたくさんいます。しかし、愛してもらえないために死にかけている人は、それ以上にたくさんいるのです。』
- ◇ 『人は皆、愛に飢えています。自分が不必要な存在だと感じることは、人にとっていちばん重い病です。』

ひとがひとを〈愛する〉ためには、まず自分自身が〈愛されている〉ことを実感することが必要です。「この人が傍らにいてくれるからこそ、私はどんなことにも耐えられ、

希望がもてる」「この人にとって私は必要な人間だ」 — 自分が愛され、同時に愛する人がいることが、生きていくうえでどんなに大きな支えになることか。今のミツとたえ子には、そんな存在がない … 、そう感じられるのでした。

《愛》ということば

ここで〈愛〉という日本語について、すこし考えてみましょう。

これをお読みのあなた — 、かつて（いや、今その状況にいるかもしれませんネ！）好きで好きでたまらない人に、自分の燃えるような気持ちを伝えた（伝えようと思う）とき、どんな言葉をつかいました（つかおうと思います）か？

「〈好きだ〉、〈大好きです〉という言葉は、何となくありふれていて自分の気持ちを十分に伝えるのには〈役不足〉や、「そんな言葉は誰でも使うから、もっとちがうセリフはないかなあ〜」と… と思いませんでした（思いません）か。

では、〈愛しています〉では …。「う〜ん、そこまで言うと言い過ぎかなあ …」、「ちょっとキザかなあ …」なんて悩んだ（悩む）のではありませんか？（以上は、忘れもしない青春真っ只中のわたしが経験した甘酸っぱい思い出なのですが …。）

なぜ、ひとは〈愛〉とか〈愛している〉という言葉の前に立つと、一瞬「今、この言葉をつかっていいのだろうか」と感じるのでしょうか（まあ、中にはあまり考えず言うひともいるようですけれど）。

ここでまた、『ケセン語聖書』をお書きになった山浦玄嗣（やまうら はるつぐ）氏にご登場いただきます。氏は同書を訳した際、ケセン語にしにくい聖書の言葉に何回も出会いました。その中でも〈愛〉はケセン語にはなかったのご苦労なさったようです。

「愛する」といったときに、ひとはまず〈男女間の愛〉を考慮でしよう。〈恋する〉とも言えます。ケセン語では「惚れた」と言うそうです。

山浦先生（医師でいらっしゃるので、これからは「先生」と書きます）は、『聖書に出てくる「愛」はこれとは違うのではないか』と思いました。『「兄弟を愛する」などと書いてあるが、ケセンにはだれも自分の兄弟に「恋する」人はいない』。そこで辞典を引っ張り出します。ここなんですネ、われわれとちがうトコは！ 疑問に思ったこと・不明なことは、徹底的に調べ尽くす！ 先生は『日本国語大辞典』（50万項目を網羅する世界最大の日本語辞典・小学館）を用いて調べました。要約すると、

『*「愛」は明治中期以後の翻訳語（英語の love, ドイツ語の lieben など）。しかも、正しい翻訳だったとは思われない。というのは、元来「目上から目下へ、強者から弱者へ」のことばであったものを対等の関係にまで持ち込み、さらには逆転して神さまにまで用いた。しかもその内容が「自己本位な感情や行為」である。』

『「織田信長は森蘭丸を愛した』』とは言うが『「森蘭丸は織田信長を愛した」とは絶対に言わない。臣下は主君を「お慕いする」のであ』る。そして、聖書では『「神さまがわれわれ人間を愛してくださる」というのはいい。われわれは神さまの被造物で、下位の存在だからだ。でも、「人間が神様を愛する」というのは「臣下が主君を愛する」というように逆転した言い方ではないか。』と書いておられます。

そして先生は、聖書に書かれた〈愛〉に関する事柄の中で、私たちにとって最大の〈大きな壁〉になると思われる『**汝の敵を愛せよ**』というイエスのことばについて、次のように言及されます。

『「好き」という感情がまず基本になれば「愛する」とはいわない。ところが「敵」というものは元来憎いものである。(中略) 憎むべきものである。(中略) 《自分に害を与えるもので、機会があればその存在を無くしたいもの》』(「新明解国語辞典」) なのです。「できれば殺したいと思っている相手」が〈敵〉なわけです。これを「愛せ」、「好きになれ」という。とんでもハッパン、歩いて30分ではありませんか！

「こんなこと、できっこないじゃん！」と、敵を愛するなんてできない自分を感じた〈まじめな方たち〉は自己嫌悪に陥るか、逆に聖書に偽善性を感じ、離れていくか … どちらかになってしまふことが少なくないように思われます。

『大事にしろ』

『これは悲劇だ』と思った先生は、愛と訳されたことばはギリシャ語ではどんな単語をつかっているのかを調べました。動詞「アガパオー」の名詞形「アガペー」を訳したものです。〈アガペー〉 — 学生時代、哲学や倫理学の授業で一度は耳にしたことばではありませんか？ 約2年前、書店で偶然見つけ手に入れた「倫理」の教科書から引用すると、

『すべての人間に平等に注がれる神の愛をアガペー (agape 博愛・神の愛) という。また、アガペーは見返りや報いを求めず、ただあたえる無償の愛でもある』。

この〈アガペー〉を『「愛する」と訳したのがそもそもの間違いだった』と先生は書いています。キリシタンたちの残した文書をお読みになっていたとき、『かれらが「愛」ということばを用い』ず、『「お大切」と訳している』ことを発見しました。

『「愛する」にはまず感情としての「好き」が必要だが、「大切にする」のには「好き嫌い」は関係がない』。例えば、わたしは某プロ野球球団が大嫌いです。名前を出すのもイヤなので、友達と野球談義を交わすときには「邪兎」と呼びます。でも選手たち(この球団じゃないと入らない)なんてバカなことを言って、ドラフト制度を無視した一部の選手は別として)には怨みはありません。すばらしい選手がたくさんいます。「憲法改悪」にも手を伸ばしている球団母体が大嫌いなのです。プロ野球の発展のためには、その球団も「大切」にしなければなりません。

『「大切にする」には上下関係も無関係』です。『神さまを「愛する」とは失礼な言い方だが、神様を「大切にする」ことは至極もつともなこと』なのです。『神さまもわたしたちを「大切にしてくださっている』のですから。ケセン語では「大事にする」と言うそうです。ですから『汝の敵を愛せ』というイエスのことばは、『「憎い敵であっても大事にしろ」という意味である。これならできるではないか』と先生はおっしゃいます。

『嫌いなやつは嫌いでいいのだ。無理に好きになろうたって、それは土台無理なのだ。そんなことはどうでもいいのだ。(中略) でも「大事にしろ」とイエスは言うのである』。

「誰からも大事にされていない」と思い込むミツ … 。その孤独に、どう立ち向かっていくのでしょうか。次回まで。

【引用した書籍】 ・遠藤周作『わたしが・棄てた・女』 ・M. K. ポール 問川みゆき編

『コルカタの聖なるマザー・テレサ』（サンパウロ、2007） ・ 山浦玄嗣『ふるさとのイエス』
（キリスト新聞社、2003） ・ 小寺聡編『もういちど読む 山川 倫理』（山川出版社、2011）